

読売新聞朝刊 2011年5月29日(日) 暮らし健康面 (p.17) の記事の私のコメントの補足です
(<http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=41412>)

より詳しく知りたい方や興味のある方は、下記の書籍もご覧ください。

吉川肇子編著 (2009) 「健康リスク・コミュニケーションの手引き」 ナカニシヤ出版

中谷内一也 (2003) 「環境リスク心理学」 ナカニシヤ出版

楠見孝 (2006) 市民のリスク認知 第7章(3) 日本リスク研究学会(編)「リスク科学事典(増補改訂版)」. 阪急コミュニケーションズ. pp.272-273.

記事：今回の事故による被曝のように①何の利益もない②自ら選んだわけではない③生命に関わる影響がある——場合は、たとえ発がんリスクが、相対的に低くても、イヤだと感じ、なるべくゼロに減らしたいと考えるのが人間の心理だという。

補足：何らかのベネフィットがある場合、そのベネフィットが大きければ、リスクを受け入れる傾向が高くなります。また自発的に接するリスク(タバコを吸う)は、非自発的に接するリスク(飲料水中の有害物質の摂取など)よりも、受け入れられやすい傾向があります。しかしながら、非自発的行為に付随するリスク、特に身体や生命にかかわるリスクは、ベネフィットがあつたとしても、かなり低くないと受け入れられにくい傾向があります。たとえば手術リスクや薬の副作用などは、リスクをできるだけゼロにしたいというよりも、むしろリスクがゼロであることを求める傾向があります。

記事：「事故の影響を心配し、個人として被曝を減らす行動をとるのは、ごく当然のこと。一人ひとりが、様々な情報を集めて、よく考えて、自分にとって最も心が落ち着く行動をとることが大切です」

補足：あることに対して不安を感じる人ほど、そのリスクを回避する傾向があります(不安、心配、ストレス、後悔予期などは、リスク回避行動と強い関連性があります)。よって今回のような原発事故の場合、強い不安を感じますので、被曝リスクを避けようとする行動をとることは自然なことです。

ただしここで注意しなければならないことは、人には以下のような傾向があるということです。たとえば、

- ・自分の信念や仮説に合致する情報は受け入れやすいが、それらに反する情報は受け入れにくい傾向があること(確認バイアス)。
- ・リスク情報への接触が多くなると、そのリスクを実際よりも高く評価する傾向があること。
- ・イメージしやすいことや思い出しやすいことは、「ありがちである」という判断をすること、つまりその事柄が生じる確率を実際よりも高く評価する傾向のこと(利用可能性ヒューリスティック)。
- ・非常に低い確率で生じることを、実際の(客観的な)確率よりも高く評価し、逆に高い確率で生じることを実際よりも低く見積もってしまう傾向があること。
- ・人がなんらかの判断や意思決定するときには、理性と感情の両方の影響を受けているが、リスクを回避するかどうかを決めるときには、感情の方が相対的に強く影響している可能性あること。

などがあげられます(もちろん他にもありますので、詳しくは参考文献をご覧ください)。

これらの傾向のため、偏った情報を収集し、公平でない判断をして、あまり適切でない行動をしてしまうことがあります。さらに場合によっては、日常生活に支障をきたすような過度なリスク回避行動(あるいは逆に全くリスクを省みない無謀な行動)をとってしまう場合もあるかもしれません。

よって私たちが適切な行動をとるためには、上記のような傾向があることを十分理解しておくことが必要となります。そしてその上で何らかの意思決定をするときには、感情に流されたり、あるいは非論理的に決めてしまわないように、

- ・根拠のある様々な情報を公平に集めて、客観的に評価し、証拠に基づいて、論理的に思考すること（批判的思考:クリティカルシンキング）

が重要です。もちろんその時には、

- ・「感情的に判断していないか」、「非論理的でないか」ということを常にチェックしておくこと

も必要です。そうした上で、自分にとって最も納得できる行動、あるいは安心できる行動をとるとよいと思います。もちろんこれら「最も納得できる行動」あるいは「安心できる行動」は、個人個人によって異なります。よってたとえ自分の行動が他の人と違っていたとしても、その行動が明らかに不適切な行動（たとえば人に迷惑をかける行為や道徳的でない行為など）でない限りは、無理に他の人にあわせる必要はないと思います。またある人が他の人たちと違う行動をとっていたとしても、非難すべきではないでしょう。

ちなみに何かを決めるときに、「後悔したくない」ということを望んでいるのならば、上記のように、よく考えた上でどうするかを決めるとよいと思います。なぜならば、

- ・よく考えて決めた場合、たとえ悪い結果になったとしても、後悔が少ないし、またその悪い結果を受け入れ、自分の過ちを認め、そして同じような失敗をしないように努力をする傾向が高い

からです。

その他：情報提供者側に対して

以下に情報提供者側が気をつけなければならないことを簡単に記します（もちろん他にも気をつけるべきことはたくさんありますので、詳しくは「健康リスク・コミュニケーションの手引き」をご覧ください）。このようなことに留意しておかないと、人々の不安感は増し、情報提供者側の信頼は失われることになるでしょう。

- ・適切な情報を十分に提供する
 - ・情報発信者側にとって都合のよい情報だけでなく都合の悪い情報も両方ともリアルタイムで提供する。もちろん情報のソースも提示する（一般市民にはわからなかったとしても、他の専門家が検証するためには必要なのです）。
 - ・都合のよい情報だけだと、情報提供者に対する信頼感が下がり、正しい情報を提供しても受け手に受け入れられにくくなる。
- ・情報を小出しにしたり、隠したりしない
- ・確率的な予想をしなければならない場合の注意
 - ・確率的な予想をしたことが外れた場合、話し手の信頼が揺らぐ恐れがあるが、その外れた方向によっても異なる
 - ・ポジティブな方向へのはずれより、ネガティブな方向へのはずれの方が、話し手の信頼性は低くなる
 - ・たとえば「医師のガン再発の予想確率は高かったが再発しなかった」よりも、ネガティブな方向へのはずれ「再発の予想確率は低かったが再発した」の方が、話しての信頼性は低くなる
- ・上記とも関連しますが、健康リスクに関して、人は情報の公開や、法的な規制などを求める傾向が高いです。よって適切な情報の公開だけでなく、法律を整備（違反企業の公表や罰則など）することにより、人々の不安感や行政などに対する不信感も低減される可能性があると思います。

2011年5月31日（2011年12月17日 参考文献追加）

筑波大学大学院システム情報工学研究科 講師 上市秀雄